

実施年度	: 2024 (2025 入試) 年度
試験日	: 2024 年 9 月 7 日
入試種別	: 大学院 (修士課程) 入学試験問題
学部・研究科	: 文学研究科 日本語日本文学専攻
科目名	: 専門科目

【解答又は解答例】

〔一〕

【A】問題用紙には、問二が二つ重なっているが、後の問二を問三として、以下問番号を一つずつずらし、末尾の問七を問八とする。

問一 大原 (名詞) に (助詞) おはします (動詞・終止形) と (助詞) ばかり (助詞) は (助詞) 聞き (動詞・連用形) 参らすれ (動詞・已然形) ど (助詞)

問二 (例) 大原にいらっしゃいますとだけはお聞きするけれど

問三 ア 作者 (建礼門院右京大夫) イ 三四人 (の近侍の人) ウ 作者 (建礼門院右京大夫)

問四 (例) 晩秋の山から吹き下ろす風が近くの梢に響きあい、懸樋の水の音や鹿の声や虫の音が聞こえるのは、山深い大原の地だけでなくどこでものことだけれども、ということ。

問五 (例) 女院 (建礼門院) の、錦の衣を重ねた六十余人の人々がお仕えていた都でのお姿を忘れてしまうほど衰えた墨染めの衣を纏った姿。

問六 (例) 「昔の雲の上の月」は、「あふぎ見し」が修飾すること、「雲の上」が宮中を意味することから、作者がかつて仰ぎ見た宮中の月、すなわち建礼門院の比喩と捉えることができる。次に、「深山の影」は、実際の「月」がかかる深山の月光の意味であるが、「月」が建礼門院を比喩することから、現在大原に住んでいる建礼門院の姿を比喩する。なお、「かかる」は、月がかかると、「かくある」の「かかる」との掛詞で、「影」は月光と姿との掛詞である。

問七 当該問題は、『平家物語』や『建礼門院右京大夫集』等、源平合戦を背景として生まれた文学作品の主要登場人物である建礼門院についての基礎知識を問うものです。例えば、建礼門院が、平清盛の娘であり、高倉天皇の中宮、安徳天皇の母であることや、壇ノ浦合戦に敗れて入水したものの源氏方に捉えられて京都に送還され大原寂光院に入ったこと、その他『平家物語』等の内容を理解していれば知っているであろう建礼門院についての知識の有無を採点のポイント

と考えています。

問八 またしなぬこの世のうちに身をかへて

なに心ちしてあけくらすらむ

又これもりの三位中将くまのにて

身をなけてとて人のいひあはれかり

しいつれもいまのちをみきくにも

【B】

問一 (例) 志賀直哉、「城の崎にて」

列車事故から生還した「私」が城崎温泉に滞在し、蜂・鼠・いもりの死を目にする。死と隣り合う生を静かに見つめ、自己の生の感覚を取り戻していく物語。

問二 中村光夫

問三 (例) 日本の自然主義文学は、作家自身の身辺や内面を忠実に描く写実性を重視したばかりに、現実社会への批評性が希薄になる側面を有していた。田山花袋『蒲団』では、中年作家が女弟子に抱く恋情や煩悶が赤裸々に告白されるが、それはあくまで個人の倫理的葛藤であり、たとえば教育制度や民主主義などの社会構造への批判には届かない。

問四 (例) 尾崎紅葉、山田美妙、泉鏡花 『我楽多文庫』

問五 (例) 昭和初期のモダニズム文学は、機械文化と都市生活、大衆文化の進展を背景に、実験的表現を追求した文学潮流である。川端康成や横光利一らの新感覚派が中心となり、伝統的な写実や内省とは距離を取り、視覚やリズムを重視した斬新な文体で近代的感受性とその不安を表現した。

問六 (例) 昭和初期のマルクス主義文学（プロレタリア文学）は、資本主義社会の矛盾や階級格差を告発し、社会変革を志向した。たとえば小林多喜二や徳永直らは、労働者の過酷な現実や集団闘争の現場を克明に描いたが、国家による弾圧のなかで次第に衰退していった。

【C】

問一 山東京伝 (例) 寛政三年三月、正月に出版した京伝の洒落本『大磯風俗 仕懸文庫』などについて、京伝、板元の蔦屋重三郎、前年十二月の地本問屋月行事二名が奉行所に召し出され、吟味の結果、京伝は手鎖五十日、蔦重は身上半減の重過料を申しつけられた。

問二 a もののほん b じほん c うりひろ d わかやま e ぼっこう

問三 喜多川歌麿 (例) 『高名美人六家撰 難波屋おきた』『婦女人相十品 ポッピンを吹く娘』など

- 問四 おうらいもの (例) 鎌倉時代から明治初期に編まれた初等教育の教科書、副読本の総称。はじめは書簡の文例集だったが、しだいに作文のための短句・単語集や文案・文例集となり、さらに社会常識、実用知識なども盛りこむものとなった。寺子屋などにおける教育に果たした役割は大きく、『庭訓往来』『商売往来』などがよく知られる。
- 問五 (例) ここでは、他の本屋が出版した書物を許可なしにひそかに出版すること。
- 問六 本居宣長 (例) 江戸時代中期の国学者。伊勢松坂の木綿問屋小津定利の二男。家督を継ぐが、若年のうちに京都に遊学し、姓を本居とする。医学を学び、伊勢に帰った後は町医者となり実地の診療を行う一方、賀茂真淵に学び、国文学と神道の研究に傾倒する。著書に『古事記伝』『玉勝間』『初山踏』などがある。
- 問七 其の巧思妙算、他の人の能く及ぶ所に非ざるなり。(例) その巧みな考えやよく考えた計画は、他の人がそれに及ぶことができるものではなかった。

【D】

- 問一 ① [ɸ] ② [m] ③ [ts] ④ [d]
- 問二 当該問題は、受験生の今後の研究に必要な基礎的な知識を問うものである。設問の性格上、解答例の提示はなじまないことから、以下に採点のポイントを示す。
- ・入学後の円滑な研究遂行が可能となるような、日本語学の基盤的な知識を身につけていることが理解できる記述内容であること。
 - ・適切な具体例を記し、それに基づいて各用語の説明ができていること。
 - ・アカデミック・ライティングの基本に則り、正しい表記および文章表現で書かれていること。
- 問三 当該問題は、受験生の今後の研究に必要な基礎的な知識を問うものである。設問の性格上、解答例の提示はなじまないことから、以下に採点のポイントを示す。
- ・入学後の円滑な研究遂行が可能となるような、日本語学の基盤的な知識を身につけていることが理解できる記述内容であること。
 - ・適切な具体例、人名、書名などを示しつつ、分かりやすく説明していること。
 - ・アカデミック・ライティングの基本に則り、正しい表記および文章表現で書かれていること。

〔二〕

当該問題は、本専攻の「入学者受け入れの方針」を踏まえ、専攻分野に関する基礎的な研究能力の一環としての、自身の研究分野を含む日本語日本文学についての基本的事項の広範な知識、および言語表現能力の有無を測定するものである。設問の性格上、解答例の提示はなじまないことから、以下に採点のポイントを示す。

- ・ 入学後の円滑な研究遂行が可能となるような、日本語日本文学に関する基盤的な知識を身につけていることが理解できる記述内容であること。
- ・ 具体例なども適切に示しつつ、分かりやすく、かつ正確な文章で説明していること。
- ・ アカデミック・ライティングの基本に則り、正しい表記および文章表現で書かれていること。